

大阪体育学会第 61 回大会

令和 5 年 3 月 19 日 (日)

主催：大阪体育学会

共催：和歌山大学

会場：和歌山大学東 2 号館

目次

1	大会長挨拶	1
2	会場・フロア案内	2
3	大阪体育学会第61回大会のご案内	3
4	学会大会に参加される方へのご案内	6
5	学会大会に参加されるみなさまへのご案内	7
6	基調講演	8
7	シンポジウム	10
8	一般研究発表	14
8.1	口頭発表	15
8.2	ポスター発表	23
9	大阪体育学会第61回大会実行委員会組織	36
10	広告・協賛企業等一覧	37

大会長挨拶



大阪体育学会第 61 回大会会長
林 修 (はやし おさむ)
和歌山大学教育学部教授

大阪体育学会第 61 回大会を私たち和歌山大学が担当させていただきます。本大会では「共生社会におけるスポーツ参加」をメインテーマといたしました。

近年、世界的潮流の中でわが国においても障害者差別解消法（2016）が制定されました。この法律は「障害による差別を解消し、誰もが分け隔てなく共生する社会を実現すること」を目的として制定されたことは周知のとおりです。こうした社会を実現するためには、私たち一人ひとりが障害の有無にかかわらず多様性を受け入れ、共生していくための環境を整えていく必要があります。

こうした考え方のもとで「インクルーシブ教育」の考え方が広がりを見せています。インクルーシブ教育とは、人間の多様性の尊重等を強化し、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするという目的達成に向け、障害のある方と障害のない方が共に学ぶ仕組み（文部科学省）とされています。

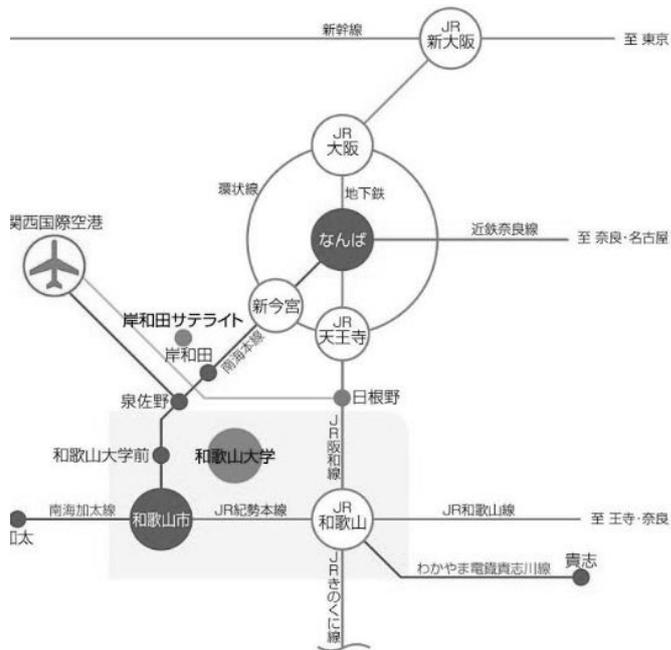
こうした共生社会に向かう今日、体育・スポーツの世界においても、障害の有無、能力の違い、性別等、一人ひとりの違いを認め合うとともにその多様性に応ずる体育・スポーツの在り方が問われているのではないのでしょうか。こうした考えから、本学会大会のテーマを設定しました。学会大会当日は、和歌山県立医科大学の田島文博先生をお迎えしての基調講演、体育、スポーツの実践を中心としたシンポジウムを企画しております。

年度末のご多用の折、しかも近畿圏内でも少し遠い和歌山の地ではありますが、会員の皆様の多数のご参会を心よりお待ちしております。

大会会長 林 修

会場案内

【電車乗り換え案内】



【アクセスマップ】



【和歌山大学前駅からのアクセス(徒歩またはバス)】



和歌山大学前駅から徒歩で
約20分かかります。

バスは約4分で到着します。

【和歌山大学前～和歌山大学バス時刻表】

※和歌山大学前駅より約4分で到着

朝	昼		夜
和歌山大学前駅発	和歌山大学前駅発	和歌山大学発	和歌山大学発
8 : 11	11 : 19	11 : 48	16 : 48
8 : 28	11 : 49	12 : 29	17 : 18
8 : 41	12 : 49	13 : 48	17 : 48
9 : 11	13 : 19	14 : 48	18 : 18
9 : 13			18 : 48
9 : 41			

【JR 和歌山駅(西口)～和歌山大学バス時刻表】

※JR 和歌山駅より約30分で到着

(JR 西口 和歌山バス4番乗り場 和歌山大学行き)

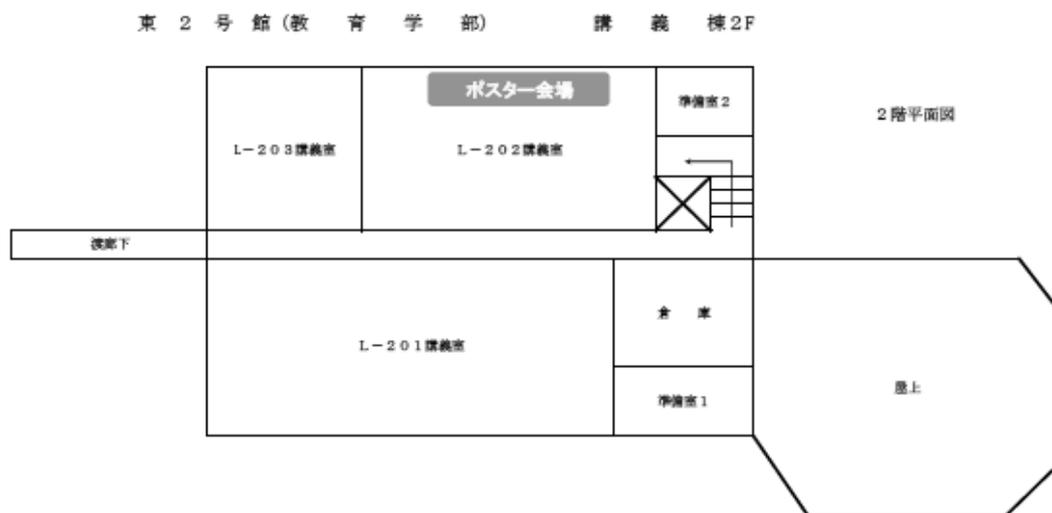
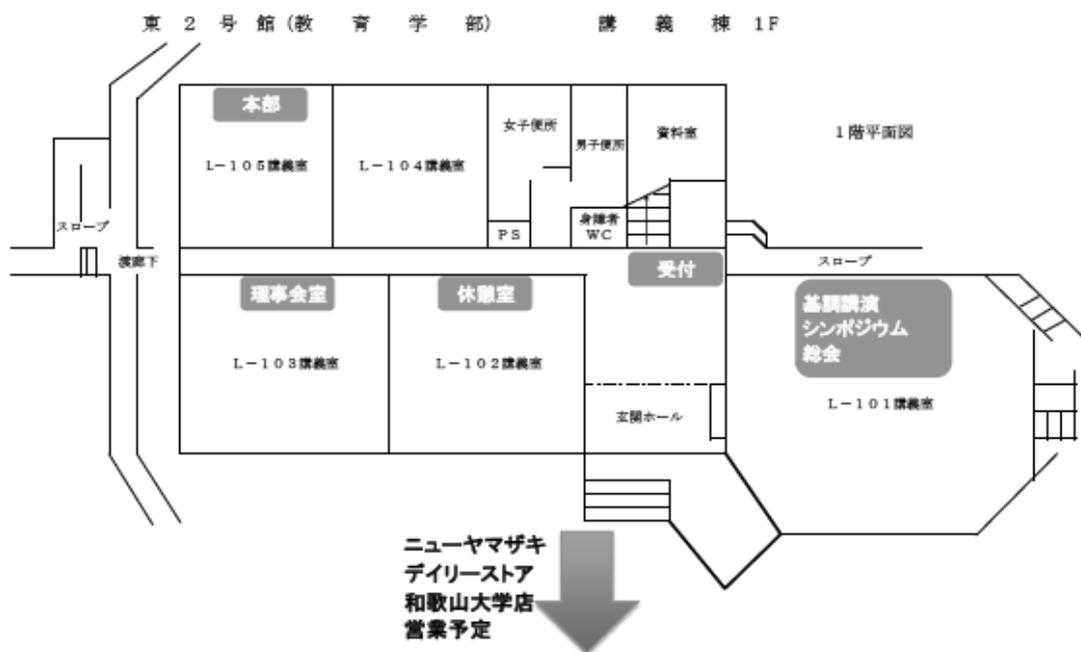
朝	昼		夜
JR 和歌山駅発	JR 和歌山駅発	和歌山大学発	和歌山大学発
7 : 42	11 : 25	11 : 24	16 : 24
8 : 50	11 : 55	12 : 24	16 : 54
9 : 23	12 : 55	13 : 24	17 : 24
9 : 50	13 : 25		17 : 54
	13 : 55		18 : 24
			18 : 54

【バス停から会場まで】

バスを降りて左手に見える大階段を登ってさらに左に進んでください。



会場図



大阪体育学会第61回大会のご案内

大会テーマ「共生社会におけるスポーツ参加」

P-1. 日時

2022年3月19日 9:20～17:00

P-2. 会場

和歌山大学東2号館（教育学部）

P-3. 日程

9:20 開会式

9:30～10:30 基調講演 「生涯スポーツ発展に向けたパラスポーツ医科学」
田島文博先生（和歌山県立医科大学医学部教授）

10:40～11:40 ポスター発表

11:40～12:30 理事会

12:40～13:40 総会

13:40～15:10 シンポジウム 「共生社会における障がい者スポーツ」

- ・北岡大輔先生（和歌山大学教育学部附属特別支援学校教諭）
特別支援学校教員から見た障がい者のスポーツ参加—水中で体を動かすよるこ
びを感じられる水泳指導—
- ・田中克実先生（東海学院大学健康福祉学部講師）
研究者から見た障がい者のスポーツ参加—共生社会に向けた障がい者スポー
ツ：デフアスリート飛躍のために—
- ・中道莉央先生（びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部准教授）
研究者から見た障がい者のスポーツ参加（特に肢体不自由者の立場から）

15:10～17:00 一般発表

17:00 閉会

P-4. 参加費	会員	1,000円
	非会員	2,000円
	学部学生	無料（発表者については1,000円が必要）

学会大会に参加されるみなさまへご案内

1. 受付（9：00～ 東2号館1F 受付カウンター）
 - ・ 受付にて所属都市名を基調のうえ、ネームカードをお受け取りください
2. 参加費
 - ・ 会員 1,000 円、非会員 2,000 円が必要となります。学部学生は無料ですが、発表者については 1,000 円が必要となります。
 - ・ なお、基調講演およびシンポジウムのみ参加は無料です。
3. 一般発表研究者、ポスター発表者をお願い
 - ・ 発表者はセッション開始 20 分前までに受付を済ませてください。
 - ・ パソコンで発表する場合は
 - ・ 資料等を配布する場合は、受付時に発表会場受付に提出してください。なお、発表資料に演題番号、演題、演者氏名、所属を明記してください。
 - ・ 口頭発表での発表時間は 1 演題 15 分（発表 10 分、質疑応答 5 分）で行います（1 鈴 9 分、2 鈴 10 分、3 鈴 15 分）。
 - ・ 次演者は次演者席にお座りください。
 - ・ ポスター発表をされる方は、発表セッション 15 分前までに掲示してください。また、ポスターの撤去は発表セッションの終了後、14 時までに行ってください。なおポスターサイズは A0 サイズ（841mm×1189mm）で作成してください。
4. 座長へのお願い
 - ・ ご担当のセッション開始 20 分前までに、発表会場入り口にて受付を済ませてください。
 - ・ 発表時間および質疑応答時間を厳守してください。
5. 会場に関する注意事項
 - ・ 会場および和歌山大学キャンパスは全面禁煙です。
 - ・ お車でのご来場は可能です。会場内の駐車場をご利用ください。
6. 昼食について
 - ・ 会場前のコンビニが営業しています。会場内でご飲食いただけます。

基調講演

生涯スポーツ発展に向けたパラスポーツ医科学

田島文博

(和歌山県立医科大学医学部教授)

座長 本山貢 (和歌山大学)



田島文博/Fumihiro Tajima

和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座教授
文部科学省認定障がい者スポーツ医科学研究拠点

生涯スポーツ発展に向けたパラスポーツ医科学

年齢を重ねても積極的に運動を行うことは、健康維持増進に極めて有効で、運動を継続するにはスポーツが最適である事は良く知られている。和歌山県では、本山貢先生を中心に高齢者への運動啓発に取り組んでいる。しかし、@@が痛い、@@が動かない、等の理由で運動を控えたり、又は医師が止めることもしばしばあった。昭和の時代から、一般的に「年なんだから」「そんなに無理しないで」と根拠無く言われていた。1981年にはじまった大分国際車いすマラソン大会は日本のそのような風潮に一石を投じた。両下肢麻痺の選手が2時間を切って走りきる姿は、行政、医学会、マスコミを動かし、東京パラリンピックの成功へ繋げた。重症障がい者でもあのようなスポーツが出来るのだから、高齢者といえどももっと運動できるはずという風潮となった。ここにたどり着くまで、パラスポーツ批判に対して、我々は40年間医科学研究を地道に続け対応し、論文化してきた。また、医療としても超急性期からの運動療法を実践してきた。障がい者・高齢者にとって「安静は麻薬、運動は万能薬」といえる。

シンポジウム

「共生社会における障がい者スポーツ」

司会：村瀬浩二（和歌山大学）

シンポジスト：

北岡大輔（和歌山大学教育学部附属特別支援学校教諭）

特別支援学校教員から見た障がい者のスポーツ参加—水中で
体を動かすよろこびを感じられる水泳指導—

田中克実（東海学院大学健康福祉学部講師）

研究者から見た障がい者のスポーツ参加—共生社会に向けた
障がい者スポーツ：デフアスリート飛躍のために—

中道莉央（びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部准教授）

研究者から見た障がい者のスポーツ参加（特に肢体不自由者
の立場から）



北岡大輔/Daisuke Kitaoka

和歌山大学教育学部附属特別支援学校 教諭

略歴

2007年より和歌山県立たちばな支援学校教諭

2010年より現職

特別支援学校教員から見た障がい者のスポーツ参加 —水中で体を動かすよるこびを感じられる水泳指導—

特別支援学校において、保健体育科の授業に泳法の習得を目標とする水泳指導を取り入れている学校は多い。しかし、現実にはその障害特性ゆえにボディーイメージの弱さや水に対する恐怖心から、水の中での体の使い方や息継ぎの仕方を習得できず、水泳への苦手意識を高めてしまう生徒もいる。こうした問題を解決するためには、生徒が夢中になって取り組み、水と親しみながら自らの意志で自在に体を動かすことのできる感覚を育てていく指導が必要と考えている。

そこで、本校で毎年実施しているアーティスティックスイミングの要素を取り入れた水泳指導を取り上げ、生徒一人ひとりの課題に応ずる水泳指導の在り方や必要な合理的配慮について検討したい。



田中克実/Katsumi Tanaka

田中克実先生（東海学院大学健康福祉学部講師）

略歴：

岐阜県立岐阜聾学校 教諭

西濃高等特別支援学校 教諭

東海学院大学 講師

デフバレーボール協会 ジュニア強化担当

岐阜県聴覚障がい者女子バレーボールチーム 監督

東海学院大学 女子バレーボールチーム コーチ

研究者から見た障がい者のスポーツ参加

共生社会に向けた障がい者スポーツーデフアスリート飛躍のためにー

2025年に第25回デフリンピック東京開催が決定した。そこは、デフアスリートにとって「夢」の舞台である。学生時代全国で活躍した多くのデフアスリートは、社会に出ると健聴者と活動することを拒む現状がある。デフアスリートにおける先行研究は限定されているが、「メンバーに仲間意識がもてる人がいる」、「聾者として生きる夢や希望を与えてくれる」ものであることが関連しているとの指摘もある。「障がい者スポーツ」から「パラスポーツ」に変わり、その種目も「障がい者」だけのものではなく、誰もが楽しめるスポーツを目指す中、聴覚障がい者へのインタビューを通して、デフスポーツは何を目指していくのかを考察した。



中道莉央/Rio Nakamichi

びわこ成蹊スポーツ大学 准教授

略歴：

〈最終学歴〉

武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学 博士（教育学）

〈職歴〉

北海道教育大学教育学部札幌校 専任講師

びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部 准教授

〈委員等〉

2025 年度第 79 回国民スポーツ大会・第 24 回全国障害者スポーツ大会滋賀県開催準備委員会内 全国障害者スポーツ大会専門委員会 委員

令和 4 年度滋賀県障害者スポーツ推進会議 委員 ほか

研究者から見た障がい者のスポーツ参加（特に肢体不自由者の立場から）

障がい者スポーツを牽引してきたパラリンピックが、当初、対麻痺者を意味する「パラプレジア（paraplegia）」のオリンピックの意で称されてきたように、障がいのある人のスポーツは脊髄損傷をはじめとする肢体不自由者が中心であった。そのなかで、花形競技とされるのが東京 2020 パラリンピック競技大会において銀メダル（男子）を獲得した車いすバスケットボールである。

本発表では、同競技にアスリートとして専念する選手に行ったインタビュー結果などを手がかりとしながら、障害者差別解消法における「合理的配慮の提供」および「事前的改善措置」と、「アダプテッド・スポーツ」との関係性を整理することなどを通し、多様な人びとの実質的な参加を保障するスポーツのあり方について考えていきたい。

一般研究発表

口頭発表(15:10-17:00)

A会場：東2号館L101

<セッション1> 座長：溝畑 潤 (関西学院大学)

15:10-15:25

- 0-1 地域在住高齢者のスマートシティーに向けた運動教室 オンデマンド型と対面を加えたハイブリッド型の効果検証
○ 灘本雅一、的場弘起 (桃山学院教育大学)、新野弘美 (帝塚山学院大学)

15:25-15:40

- 0-2 知的障害特別支援学校の体育授業における武道学習の考え方と進め方
○清野 宏樹 桃山学院教育大学

15:40-15:55

- 0-3 慣性センサを用いた跳び箱運動の測定手法
○村田和隆 (太成学院大学)

15:55-16:10

- 0-4 スポーツの経験が体育授業の身体活動強度に及ぼす影響について
○松元隆秀 (桃山学院大学スポーツ教育センター)

<セッション2> 座長：陳 洋明 (国士舘大学)

16:15-16:30

- 0-5 スレッドを使用した高強度レッグドライブトレーニングが短距離スプリント能力に及ぼす効果 ―高強度スクワットトレーニングとの比較―
○佐名木宗貴 (関西大学大学院人間健康学研究科)、石原千穂 (関西大学大学院人間健康学研究科)、谷所慶 (関西大学)

16:30-16:45

- 0-6 『笑うスポーツ』によるスポーツの楽しさを伝える取り組み
―スポーツイベントを運営する学生の成長に着目して―
○橋本剛幸 (近畿大学経営学部)

16:45-17:00

- 0-7 中学校保健体育科教師が抱く生徒指導観の検討
○片上 健太郎 (宝塚市教育委員会)、山口 孝治 (佛教大学)

地域在住高齢者のスマートシティーに向けた運動教室 オンデマンド型と対面を加えたハイブリッド型の効果検証

○ 灘本雅一¹⁾、的場弘起¹⁾、新野弘美²⁾ 1) 桃山学院教育大学 2) 帝塚山学院大学

キーワード：スマートシティー、オンデマンド、身体機能、認知機能、活動量

目的

COVID-19 が発症してから、三密(密閉、密集、密接)という行動制限の生活習慣となり、運動機会の減少が問題視されている。ペアで行う密接を伴う運動の効果として、身体機能はもとより、認知機能の改善効果も期待される(灘本ら, 2022)。スマートシティーに向けて、高齢者もスマートフォン必携化の時代になる。

そこで、トレーニング記録や運動量の見え方を目的に開発したアプリを活用して、対面とスマートフォンによるオンデマンドのハイブリッド型運動教室の約6月間にわたる効果について、低運動群と中強度運動群の効果について検証することを目的とした。

方法

S市在住の65~87歳までの高齢男女37名を対象とした。対象者を低強度運動群と中強度運動群に分類した(表1)。

表1 対象者

項目	低強度群(18名)	中強度群(19名)	有意差
年齢(歳)	78.4 ± 4.2	70.2 ± 3.0	P<0.01
身長(cm)	153.6 ± 4.6	157.4 ± 9.8	
体重(kg)	54.0 ± 8.8	57.7 ± 9.8	
SMI	6.3 ± 0.7	7.0 ± 0.9	P<0.01

表2 研究計画

項目	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
	説明会	測定	オンデマンド教室	測定	対面運動教室	測定	
低強度群	研究協力	身体機能	筋トレ動画配信	身体機能	筋トレ+ストレッチ	身体機能	
中強度群	同意書	認知機能	スマホ上で記録	認知機能	筋トレ+有酸素運動	認知機能	

介入期間は、2021年12月~2022年6月までとした(表2)。オンデマンドでの介入運動は、自重

でのスロートレーニング30分間とウォーキング30分とした。ハイブリッド型では、ストレッチ運動(低強度)、インターバルウォーク(中強度群)を加えて、60分間、週2回実施した。

評価項目は、活動量(月間平均歩数)、身体組成、筋機能(握力、下肢筋力)、バランス機能(重心動揺、2stepテスト、Functional Reach Test、Timed Up and go Test、5m歩行テスト)、運動機能(全身反応時間、10秒間ステッピング)、認知機能(高齢者集団認知検査)を用いて、オンデマンド教室とハイブリッド教室(対面とオンデマンド)の前後に計3回計測した。

結果と考察

月間歩行は、中強度群が低強度群より有意に高い値を示した。低強度群と中強度群の効果の交互作用は、バランス機能の重心動揺軌跡と2stepテスト、Timed Up and go Test、認知機能の再生記憶に現れた。中強度群では、オンデマンド期間より、ハイブリッド期間に主効果が現れた。一方、下肢筋機能と全身反応時間は、プレに比べてオンデマンド期間で向上した。本研究からオンデマンドでも効果はあるもののハイブリッドでより効果が伺われた。

まとめ

スマートシティーに向けたスマートフォンのオンデマンドを活用した運動教室は、コロナ禍でも筋機能への刺激を与えることが出来たが、ハイブリッドの方がより効果が得られた。

知的障害特別支援学校の体育授業における武道学習の考え方と進め方

○清野宏樹（桃山学院教育大学）

キーワード：相撲，空手道，攻防の面白さ

緒言

特別支援学校を始め、各学校での武道の取り組みが低調である。本家本元の日本の学校体育でなぜ低調なのだろうか。柳田（2016）や時光ら（2016）の調査によれば特別支援学校（学級）では、危険性の高さや指導者・用具の不足といった理由から武道学習の実施率の低さが指摘されている。そのため、安全性を保ち、楽しさや教育効果が期待できる武道の指導法の開発が今、求められている。

そこで武道の授業におけるより良い考え方と進め方を検討することを目的とした。

菊（2010）は、子ども自らが学習内容に興味や関心をもち、お互いに学び合う学習過程や学習形態の工夫が求められるという。具体的には、障害のある子どもと運動の関係からなじみやすい場づくりから始め学習内容として運動遊びや運動のアナログの充実した開発により子ども自らが武道に関心をもち意欲的に学習に取り組めると考え、相撲と空手道の実践を行った。

結果

相撲遊びでは、身体接触経験のほとんどない小学1年生が、障害や発達の状況を十分に考慮された「おしくらまんじゅう」のような身近な伝承遊びから学習を始めることで、「相撲遊び」をより身近なものとして取り組めた。また、子どもたちの興味を引くような力士の姿をした様々なキャラクターのサンドバッグを用意したことで、押したり、張り手を何度も行い倒したりすることを通して、全身の力を余すことなく使った力試しができた。

空手道では、コロナ渦でも適切な距離を保ちやすく、高等部の生徒たちで、基本の突きや蹴りを意識して行うことができた。特に、回し蹴

りが楽しい様子で、真剣な表情で蹴り足を回転させた。ミットや新聞紙試割りでも、実際に突きや蹴りを打ち、夢中になって行っていた。自由組手では、教師と寸止めの為、あまり恐怖心を抱かずに突きを中心に対戦することができた。

考察

相撲や空手道は、武道領域の中でも比較的容易に実践できるのが特徴の一つである。学習過程の工夫として、導入段階で、子どもたちが運動になじめて楽しめることを重視した。それから徐々に、教師が子どもの力量に合わせて対戦（ゲーム）をし、段階を踏んで子ども同士の試合に移行した。そこでは、攻防やかけひきの面白さを味わっている様子があった。武道の学習に楽しそうに取り組む子どもたちの姿から、障害の有無を越えて、武道の学習の可能性が見られた。それは、特別支援学校小学部の体づくりの運動遊び領域の「自分から友達と仲良く」から相撲遊びを実践できるように工夫した。つまり小学校1年生から武道入門は実践でき、極論をいえば、工夫次第で、小学校から武道も領域として位置づけられる。言うまでもなく、特別支援学校だからできないということはない。

まとめ

武道は総合総称（山下，2010）であり和魂洋才の型の文化（井上，2004）であり武術をスポーツ化した（草野，2019）ものである。清野ら（2019）は、「楽しさ」を基調としたスポーツとしての障害者スポーツを提唱した。武道もさらにスポーツとして楽しむ考え方や実践を進めていくことで子どもたちにとっての豊かな武道ライフさらにはスポーツライフを拓くことになる。

それは、今、武道授業が様々な実践から、さらなる進化を遂げなければいけない時に来ている。

慣性センサを用いた跳び箱運動の測定手法

○村田和隆（太成学院大学）

キーワード：跳び箱運動，慣性センサ，接地時間，技能評価

目的

近年では ICT デバイスの普及により，比較的安価で高性能な測定が可能となってきた。本研究では，小型かつ非拘束でスポーツ動作を測定できる機器として注目されている慣性センサを用いた跳び箱運動の測定手法を考案することとした。

方法

被験者は健康な成人男性 6 名，成人女性 3 名の合計 9 名とし，実験試技は跳び箱 6 段（高さ 115cm，奥行 120cm）の開脚跳びとした。被験者の腰部後面にウエストポーチを装着させ，その中に慣性センサ（AMWS020, ATR-Promotions 社）1 台を入れた。慣性センサにより加速度と角速度を 1000Hz のサンプリング周波数で測定し，跳躍の様子を側方 15m の位置と踏切板付近に設置したハイスピードカメラ（DSC-RX0, Sony 社）を用いて撮影した。ハイスピードカメラのフレームレートは 960fps，シャッタースピードは 1/1000 秒とした。慣性センサから得られた加速度と角速度からセンサフュージョンの手法を用いてグローバル加速度を算出し，鉛直成分から重力加速度の影響を取り除いたリニア加速を算出した。さらに，リニア加速度を時間積分することによってリニア速度を算出した。

結果と考察

図 1 に被験者 A の開脚跳びの跳躍局面におけるリニア加速度とリニア速度の鉛直成分の推移を示し，先行研究の手法を参考として，踏切板に接地する 1 歩前の踏切から踏切板に接地するまでの局面（予備踏切局面）と踏切板に接地してから離地するまでの局面（踏切局面）を同定した。

被験者のうち，唯一跳び箱を跳び越すことができなかった被験者 E は踏切板との接地時間が最も長く，前後成分の最大速度が最も小さかった。

まとめ

慣性センサを装着して跳び箱運動の開脚跳びを行わせることで，踏切板の踏切時間や前後成分の最大速度などの技能評価に有用な項目を測定することが可能となった。

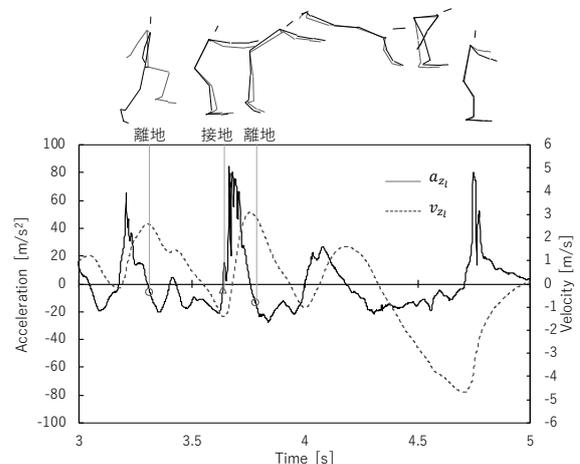


図 1 リニア加速度・リニア速度鉛直成分の推移

口頭発表

スポーツの経験が体育授業の身体活動強度に及ぼす影響について

○ 松元隆秀（桃山学院大学スポーツ教育センター）

キーワード：体育実技、身体活動量、スポーツ経験

目的

これまで、客観的指標を用いて大学生を対象にスポーツ経験と身体活動強度の関係について着目した研究は少ない。田中は、大学生を対象に1日当たりの身体活動量について加速度計を用いて測定しており、男性では高校の時期、女性では、中学校、高校の時期に運動・スポーツに参加していた学生の座位時間が短く、中強度、中高強度の活動量が高かったことを報告している。

しかしながら、過去のスポーツ経験が体育授業の身体活動強度に影響するか検討した研究は見当たらない。そこで、本研究の目的は過去のスポーツ経験が体育授業の身体活動強度に影響を与えるか検討することとした。

方法

本研究の対象者は、M大学の健康スポーツ科学実習を履修している大学生59名（男性39名、女性20名）平均年齢20歳の集団とした。過去のスポーツ経験は授業内でMicrosoft Formsを用いて回答させた。体組成の評価として体重、身長、体脂肪率、BMI (body mass index)、筋肉量を体組成計を用いて測定した。身体活動量については、Active style pro HJA-750c（オムロン社製）を用いて測定した。測定器期間は授業の開始から終了までとした。授業内容および季

節による身体活動量の変動を考慮し、授業の3回目、6回目、9回目、12回目の計4回測定し、その平均値を代表値とした。

結果と考察

対象者の体組成は授業の期間で有意に変化することはなかった。身体活動強度については、男性と女性で比較したところ、男性の方が授業内の平均歩数と中等強度活動時間が有意に多かった。また、現在の運動習慣で対象を2群に分け比較したところ、運動習慣を有する集団は有意に平均歩数が多かった。しかしながら、過去のスポーツ経験の違いで身体活動強度について検討したがいずれの項目も有意な差は認められなかった。

スポーツ経験が身体活動強度に影響を及ぼさなかった理由として対象者の性質が関係していると考えられる。今回、対象とした授業は全学性が対象ではなく、あくまでも運動したいという意欲のある学生が履修している授業である。そのため運動意欲に差はないため、授業内の身体活動強度に影響を与えなかった可能性がある。

まとめ

本研究では、過去のスポーツ経験が授業内の身体活動強度に影響を及ぼすのか検討したところ、過去のスポーツ経験は授業内の身体活動強度には影響を及ぼさない可能性が示唆された。

スレッドを使用した高強度レッグドライブトレーニングが短距離スプリント能力に及ぼす効果

—高強度スクワットトレーニングとの比較—

佐名木宗貴（関西大学大学院人間健康学研究科）、石原千穂（ 関西大学大学院人間健康学研究科）、谷所慶（関西大学）

キーワード：トレーニング、筋肥大、筋力増強、短距離スプリント

目的

ボディコンタクトを含む球技において身体が衝突するプレーでは、スプリント開始から衝突までの勢いがパフォーマンスを左右し、そのパフォーマンスを向上させるためには、短距離スプリント能力と体重の増加が重要であると結論付けられている。

本研究では、コンタクト系球技のトレーニングに用いられる、スレッドを使用した高強度レッグドライブトレーニング

（HILD）が短距離スプリント能力と筋肉量の増加に与える効果を検証すると共に、高強度スクワットトレーニング（HISQ）の効果との比較を行い、身体の衝突を伴うプレーとその後の前進力の向上について、その有用性を明らかにすることを目的とする。

方法

被験者は関西アメリカンフットボールリーグディビジョン1に所属するトレーニング歴1年以上の大学生男性31名で、HILD群15名（身長 173.1 ± 4.3 cm、体重 84.9 ± 14.9 kg、体脂肪率 $20.5 \pm 8.3\%$ ）、HISQ群16名（身長 174.0 ± 4.4 cm、体重 83.9 ± 8.3 kg、体脂肪率 $21.6 \pm 5.6\%$ ）に分け、それぞれ週2回5セットずつ8週間の

トレーニングを行い、トレーニング前後の形態（体重、大腿周径）、身体組成（体脂肪率、筋肉量）、5mおよび10mスプリント、垂直飛び高、WattBike6秒間ピークパワーテストを測定した。

結果と考察

5mスプリント能力では平均値と効果量に大きな差がみられたものの、主効果及び交互作用は認められなかった。またスクワット1RM測定では両群共に主効果および交互作用が認められた。CMJ、最大パワー、体重、下肢及び体幹部の筋肉量では、両群共に主効果が認められたが交互作用はなかった。

まとめ

本研究の結果は、HILDによって、短距離スプリント能力の向上と筋肉量の増加による体重増の両方を同時に獲得することができ、身体の衝突を伴うプレーのパフォーマンスを向上させる可能性がある事が考えられた。

またCMJ、最大パワー、下肢及び体幹部の筋肉量の増加においては両群に差が無かったことからジャンプ力や無酸素性パワー、筋肥大効果においてHILDにはHISQと同等の効果があることが示唆された。

『笑うスポーツ』によるスポーツの楽しさを伝える取り組み —スポーツイベントを運営する学生の成長に着目して—

○橋本剛幸（近畿大学経営学部）

キーワード：笑うスポーツ、スポーツへの興味、学生の意識変化

目的

令和2年10月より、吉本興業との共同研究を開始し、『笑うスポーツ』の共同開発をスタートした。これは、スポーツをする楽しさを体験してもらう機会を提供するため、見ても楽しい、やったらもっと楽しいスポーツを創造し、その体験会を様々なところで開催し、スポーツに興味を持ってもらうための試みである。著者のゼミ学生と吉本興業所属芸人などが協働で、ニュースポーツを創造し、その体験会を企画し、スポーツの楽しさを伝えていくものである。

これまでに27種目の『笑うスポーツ』を作成し（考案中のものも含む）、その体験会を企画してきたが、新型コロナウイルスの影響もあり、体験会については3回しか行えていない。しかしながら、3回の体験会を行うことで、運営した学生たちに意識の変化が生まれ、大きな成長を感じることができた。本研究では、運営に携わった学生の意識変化の分析し、これまでの体験会での参加者アンケート調査を踏まえ、『笑うスポーツ』の今後のあり方とスポーツイベントの定着した開催に向けた取り組みへの一資料とすることを目的としている。

方法

これまでに行なってきた『笑うスポーツ』体験会の運営に携わった学生たちの意識や当日の行動記録の分析、検討を行い、参加者アンケートの結果も踏まえながら、『笑うスポーツ』の今後のあり方とその体験会を定着させるための課題を明確にする。体験会は以下の通りである。

- ・令和3年12月11日ワクワク！スポーツ体験会！（丸善インテックアリーナ大阪）
- ・令和4年7月24日YOSHIMOTO SPORTS

FESTIVAL '22（エディオンアリーナ大阪）

- ・令和4年11月26日ラフ&スポーツフェスティバル2022（ノア・フットサルステージ久宝寺）

結果と考察

運営に携わった学生たちは、3回とも同じメンバーではない。年度を跨いでいるおり、ゼミ生の世代も変わっているため、その意思が引き継がれているかが継続のためには重要なことである。有名芸人たちが多く参加するイベントの中で、緊張感もあり、とにかく自分たちの創造したスポーツを楽しんでもらおうと懸命に運営をするのが当初は精一杯であった。芸人に助けってもらうことも多く、スポーツの楽しさを体験してもらうことの難しさを体感している学生がほとんどであった。しかしながら、3回目（令和4年11月開催）では、体験ブースを学生たちだけで運営し、自分たちも楽しみながら、参加者にも楽しんでもらうことができるようになっていた。ゼミ学生の中に先輩たちから引き継いでいく意識が生まれ、今後どのように継続、発展させていくかを検討しようとする行動も見られている。



まとめ

学生の成長は、頼もしい限りである。『笑うスポーツ』の創造という取り組みが、携わってきた学生たちの意識も変化させ、今後につながっていくことは重要である。『笑うスポーツ』の創造を今後も継続し、体験会を通して参加者にもその重要性を伝え、スポーツに対して興味を持ってもらい、その楽しさを広げていくことが重要であると考えている。

中学校保健体育科教師が抱く生徒指導観の検討 ～学級経営に関する意識調査をもとに～

○片上 健太郎（宝塚市教育委員会），山口 孝治（佛教大学）

キーワード：中学校保健体育科教師，学級経営，生徒指導，M-GTA

1 目的

中学校における不登校の割合は，平成30年から現在まで増加傾向にある。これらの現状を踏まえ，効果的な課題解決に取り組むにあたり，学級経営は重要な役割を果たしており，効果的な学級経営を目指す必要性がある。特に教科担任制を中心とした中学校では，教科の特性を生かした学級経営の手法が重要であると考えられる。

本研究では，中学校において生徒指導の役割を担当することが多い体育教師に焦点を当て，学級経営の観点から彼ら（彼女ら）が抱く生徒指導観の検討を行うこととした。

2 方法

学級担任経験を持つ中学校の体育教師10名を対象とした。教職経験7年目から37年目の男性7名，女性3名であった。質問内容については，対象者に半構造化インタビューを行い，体育教師の今後のあるべき姿が表出されるよう工夫した。分析の手続きとして，記録により文字化したデータを修正版M-GTAを用いて分析した。具体的には，体育教師が行う学級経営に関する役割意識について，データの関連個所に着目し，それを一つの具体例とした。また，他の類似具体例の抽出を行い，概念の生成を行った。概念を生成する際，分析ワークシートを作成し，概念名，定義，具体例の記入を行った。生成した概念の完成度は，類似例の確認も行いながら，対極例の比較を行うことで解釈が恣意的に偏る危険性を防いだ。これらの手続きについては，研究協力者を含めて4名で行った。

3 結果および考察

M-GTAによる分析の結果，4つのカテゴリと12の概念が生成された。それらをもとに全体的な関係の結果図を作成し，以下に示すストーリーラインを導出した。

体育教師は，学級生徒に対して目指すべき学級像を明確にするため，コミュニケーションを重視している。複雑な要因がからみあって，目指すべき学級像と体育教師に対する印象と指導の方向性は，学級リーダー育成への願望となり，学級の生徒へのかかわり方となっている。また，そのことが体育教師の学級経営の長所として発揮されている。しかし，体育教師は，深い悩みや葛藤を抱えながら生徒に関わっている。

すなわち，体育教師として周囲からの期待を背負い，それに応えるようとする役割意識とそれでいいのかという葛藤に向かい合っている。一方，教科の指導力を高めることへの意識の向上も認められ，それらが今後，求められる体育教師像であることも認識している。

4 まとめ

本研究では，学級担任経験を有する中学校保健体育科教師にインタビューを行い，学級経営を行う際に伴う問題とそれらへの対応方法をどのように認識し，行動しているのかを明らかにした。その結果，学級担任経験を有する体育教師は，第一に学級経営に体育教師独自の手法で学級経営を行っており，周囲の期待に応えながらも葛藤を繰り返し，常に教育効果を高める努力をしていたことが認められた。第二に，体育教師は，生徒へのコミュニケーションを必須の手順として，目指すべき今後の在り方について，教科指導の重要性とリーダー育成を認識していることが示された。

ポスター発表（10：40～11：40）

ポスター会場：東2号館L201

- P-1. 自己肯定意識と部活動適応感の関係
-国内トップレベルの部活動を対象として
○川村亮太（大阪体育大学大学院）、前田優（大阪体育大学）、菅生貴之（大阪体育大学）
- P-2. アスリートにおける認知的方略とバーンアウトプロセス状態との関係性の検討
○池田和司（大阪体育大学大学院）、岡田菜月（大阪体育大学学部生）、奥野真由（久留米大学）、土屋裕睦（大阪体育大学）
- P-3. 幼稚園教育における「森のようちえん」活動の導入効果について
-幼児の反応と客観的アンケート調査から体力に着目して-
○本山司（高野山大学）、柳原高文（高野山大学）
- P-4. 特性不安傾向のスポーツ選手の中枢情報処理能力の予備的検討
-オドポール課題を用いた画像刺激におけるCNVとP3を指標として-
○渡邊浩輝（大阪体育大学大学院）、菅生貴之（大阪体育大学）
- P-5. 学校種別による情動知能と心理的競技能力の関連
-高校生および大学生女子ソフトボール選手を対象として-
○渋谷愛佳（大阪体育大学大学院）、土屋裕睦（大阪体育大学）
- P-6. チームメイト間における対人ストレスとあがりの関連性について
-大学女子サッカー選手に着目して-
○大田亜海（大阪体育大学大学院）、土屋裕睦（大阪体育大学）
- P-7. 小学校体育科におけるネット型ゲームの授業研究
-「バウンドゲームから3人バレーボール」への積み重ねの有効性について-
○田井萌々香（和歌山大学）
- P-8. オンライン放課後-運動遊びを通じた子どもの居場所づくり-
○村瀬浩二（和歌山大学）

- P-9. 中学校保健体育科における攻守一体プレイ型（テニス）の授業実践
ー中学校入門期の生徒を対象にー
○川島千鶴（和歌山大学）
- P-10. 吹きこぼれ・落ちこぼれをつくらない共生体育による児童の変化と効果
○河彩歌（和歌山大学）、村瀬浩二（和歌山大学）
- P-11. 体育科授業におけるドローン映像の活用
○大岡諒真（和歌山大学）、村瀬浩二（和歌山大学）
- P-12. 紀美野町におけるスポーツを活用した地域課題の解決に向けた取り組みの検証
○相奈良律（公益財団法人大阪府レクリエーション協会）、横山誠（大阪国際大学）、中野卓（Kimino Labo）
- P-13. コロナ禍におけるアウトドアレクリエーションの評価に関する一考察
○横山誠（大阪国際大学）

自己肯定意識と部活動適応感の関係

-国内トップレベルの部活動を対象として-

○川村亮太(大阪体育大学大学院), 前田優(大阪体育大学), 菅生貴之(大阪体育大学)

キーワード: 対自己領域、対他者領域、不適応傾向

目的

国内トップレベルの部活動に所属する大学生アスリートを対象に自己肯定意識と部活動適応感の関係を検討することを目的とした。

方法

国内トップレベルの部活動に所属する大学生アスリート 40名(男性5名, 女性35名)に対し Google Form を用いてオンライン上で調査を行った。「自己肯定意識尺度(平石, 1990)」と「部活動・サークル適応感尺度(須崎ほか, 2017)に5件法で回答を求めた。

自己肯定意識尺度と部活動・適応感尺度の各下位因子の関連について Pearson の相関分析を行った。

結果

自己肯定意識尺度と部活動適応感との相関分析の結果を以下に示す。自己肯定意識の対自己領域の「自己受容」と「部活動への傾倒」では中程度の正の相関($r=.61, p<.05$), 「不適応傾向」とでは中程度の負の相関($r=-.40, p<.05$), 「成員・組織への満足」とでは弱い正の相関($r=.34, p<.05$)が認められた。「自己実現的態度」と「部活動への傾倒」では中程度の正の相関($r=.67, p<.05$), 「不適応傾向」では中程度の負の相関($r=-.44, p<.05$), 「成

員・組織への満足」では中程度の正の相関($r=.46, p<.05$)が認められた。「充実感」と「部活動への傾倒」では中程度の正の相関($r=.61, p<.05$), 「不適応傾向」では中程度の負の相関($r=-.53, p<.05$), 「成員・組織への満足」では中程度の正の相関($r=.46, p<.05$)が認められた。一方で対他者領域である「自己閉鎖性・人間不信」では「不適応傾向」で中程度の正の相関($r=.56, p<.05$), 「成員・組織への満足」で中程度の負の相関($r=-.42, p<.05$)が認められた。「自己表明・対人的積極性」では「部活動への傾倒」でのみ中程度の正の相関が認められた。「被評価意識・対人緊張」では「部活動への傾倒」で中程度の負の相関($r=-.41, p<.05$), 「不適応傾向」で中程度の正の相関($r=.41, p<.05$)が認められた。

考察

本研究の結果, 部活動適応感において自己肯定意識の対自己領域と特に関連が深いことが明らかになった。佐伯ほか(2006)は感動体験が自己肯定意識を高めることを明らかにしている。本研究の対象者は競技において感動体験を多く経験していると推測されるため, 感動体験を通して自己肯定意識が高まり, 部活動適応感が高まるというプロセスが想定される。

アスリートにおける認知的方略とバーンアウトプロセス状態との関係性の検討

○池田和司（大阪体育大学大学院），岡田菜月（大阪体育大学 学部生），

奥野真由（久留米大学），土屋裕睦（大阪体育大学）

キーワード：防衛的悲観主義，固執状態，消耗状態，大学生アスリート

<目的>

本研究では，アスリートの認知的方略がバーンアウトプロセスにおける各状態においてどのような特徴があるのかを検討することを目的とした。

<方法>

対象者：体育系大学の学部生のうち，現在競技を継続している164名（男子77名，女子87名）を調査対象者とした。（年齢：20.55±1.03歳）

調査内容

①アスリート版認知的方略尺度：奥野・土屋（2022）が作成した，競技スポーツ場面での認知的方略を測定するための尺度を使用した。

②スポーツ選手版バーンアウトプロセス尺度（ABPQ）：田中ほか（2016）が作成した，バーンアウトプロセスの各状態の得点を測定するための尺度を使用した。

<結果>

調査対象者を認知的方略のタイプ別で群分けするために，アスリート版認知的方略尺度の各下位尺度の標準化得点に基づいてクラスター分析（Ward法）を行い，4つの解釈可能なクラスターを採用した。また，4つのクラスターを独立変数，認知的方略尺度の各下位尺度の標準化得点を従属変数として一要因分散分析を行い，それぞれのクラスターの特徴を明らかにした。認知的方略の分類については光浪（2010）外

山（2015）を参考に第1クラスターを悲観主義群（RP群），第2クラスターを楽観主義群（RO群），第3クラスターを防衛的悲観主義傾向群（DP群），第4クラスターをメタ認知低群（LM群）とした。

次に得られた4つのクラスターを独立変数，バーンアウトプロセス尺度の各因子得点を従属変数とした一要因分散分析の結果，すべてのバーンアウトプロセス状態において有意な差が認められた。そこで多重比較（Tukey法）を行ったところ，熱中状態ではRO群がRP群・LM群より得点が高いことが示された。停滞状態では4群間で有意な差は認められなかった。固執状態では，DP群がLM群・RO群より得点が高いことが示された。RP群はRO群より得点が高いことが示された。消耗状態では，DP群・LM群・RP群はRO群よりも得点が高いことが示された。

<まとめ>

本研究の結果からRP群とDP群は，競技への強い固執状態が想定され，それに伴い消耗状態が高いことが示唆された。その背景には高い不安の認知が考えられる。つまり，DPにおいての不安は努力を動機づけるといったポジティブな側面があるとされている一方で，競技への固執・消耗状態を強めバーンアウト傾向を深刻化させるネガティブな側面も含んでいる可能性が示唆された。

幼稚園教育における「森のようちえん」活動の導入効果について

－ 幼児の反応と客観的アンケート調査から体力に着目して－

○本山司（高野山大学）、柳原高文（高野山大学）

キーワード：幼稚園教育、森のようちえん、生活科、アンケート調査、体力

目的

2020年1月から世界各国で浸透した新型コロナウイルス感染症の影響を受け、男女ともに体力低下に拍車がかかっている（文部科学省，2021）。鈴木ら（2022）は、幼児においても急激な自粛生活によって、食事、睡眠、身体活動量に様々な要因の影響を受けて、体力や運動能力が低下し、さらに肥満、精神衛生の悪化など健康を阻害する要因が出現し、遷延化する可能性を問題視している。本山ら（2020）は幼児期や児童期前半に高く跳ぶ・遠くに跳ぶ動作の運動経験が重要であり、その経験不足が体力低下の根本的な問題だと指摘した。そのためできるだけ幼児期や児童期前半の早い時期に個別または集団での運動経験や指導が必要不可欠になる。

1990年代半ばごろから日本各地で「森のようちえん」と名付けられた活動が盛んになり（高橋・久保田，2020）、そのなかで自然環境は身体的・精神的健康に決定的に役立つ（ヘフナー，2009）とされている。

そこで、本研究は「森のようちえん」活動を行っていない幼稚園教育の現場において「森のようちえん」活動を取り入れることで幼児の活動に対する体力や活動状況などにごのような変化や効果をもたらすのかについて、保育者の客観的視点からアンケート調査をもとに明らかにすることを目的とした。

方法

C短期大学附属幼稚園に在園している年長組（5歳から6歳）の幼児46名、男子24名、女子22名を対象とし、K大学河内長野キャンパスに隣接する山林（以下、森）で「森のようちえん」活動を計5回実施し約1ヶ月半の期間行った。さらに、保育者6名が活動に参加し、幼児の安全見守

りを行った。アンケート調査については6名の保育者を対象とした。

行動観察は、森で活動する園児たちの様子をビデオカメラなどの観察媒体を用いて分析を行った。アンケート調査は、「森のようちえん」活動と客観的な体力評価について質問を自由回答も含めながら実施した。アンケートは筆者独自に質問項目を作成したものを使用した。

結果と考察

「森のようちえん」活動という日頃体験することができない自然環境で自由に活動する取り組みは、子どもたちの好奇心を刺激し、自発的に楽しむ力が高まっていたと考えられる。また友達との関わりを通して子ども特有の発想力が引き出され、挑戦心も湧き、回数を重ねるごとに楽しもうとする意欲が現れていた。色々な活動や遊びを通して他者への関心が芽生え、新たな関わりに繋がったと考えられる。さらに本活動では自然に触れることで子どもたちの創造性を掻き立て、友達の真似などを経て独自性の持った動きを身につけながら感覚器官や運動器官を発達させていく。そして、1か月半の短期間で5回の活動であった。さらに保育者の客観的な視点の評価であったが、筋力や筋持久力など幼児の基礎運動能力全体に強く影響を与え体力向上を促す取り組みになっていた可能性が考えられる。

まとめ

今後、体力評価の工夫や実践者と非実践者の比較研究として計画し、長期的な効果検証を行っていきたい。

特性不安傾向のスポーツ選手の中枢情報処理能力の予備的検討

—オドポール課題を用いた画像刺激における CNV と P3 を指標として—

○渡邊浩輝（大阪体育大学大学院）、菅生貴之（大阪体育大学）

キーワード：あがり、中枢情報処理能力

目的

本研究は、スポーツ選手を対象に特性不安傾向の高まりと中枢情報処理能力(随伴性陰性電位：CNV, P3)の関係を検討することを目的とした。

方法

実験参加者

事前にインフォームドコンセントをうけた男性の体育専攻学生6名であり、特性不安傾向の測定には、日本版 STAI 状態・特性不安検査を用いた。

脳波記録と分析

電極位置は頭皮上より誘発電位を記録するため、国際 10-20 法に従い、Fz、Cz、Pz の 3 カ所とし、基準電極は片耳朶連結とした。

課題

オドポール課題を用いた。視覚刺激は、刺激呈示用の PC から導出されるモニター画面(1366×768px)に、画面中心から直径 3 cm の白色の円または赤色の円のいずれかが、ランダムに表示される。この刺激に対して、赤色の円を標的刺激としてボタンを押して反応、白色の円は非標的刺激として反応しない課題とした。

統計分析

特性不安得点の高まりと CNV の平均電位ならびに P3 振幅および潜時の関係を検

討するため、Spearman の順位相関係数を算出した。

結果

Spearman の順位相関係数を算出した結果、特性不安の高まりと Cz における P3 振幅において有意な正の相関関係が認められ($r = .886, p < .05$)、また特性不安の高まりと Pz における P3 振幅において有意な正の相関関係が認められた($r = .886, p < .05$)。その他の成分には関連が認められなかった。

考察

本研究の結果、特性不安得点の高さが P3 振幅と関連があることが明らかとなった。P3 振幅は、刺激に対する注意や集中を反映しているといわれており(大熊,1999)、P3 振幅が増えるということは、刺激に対して注意資源を多く向けていることになる。不安傾向とパフォーマンスに関する多く研究では、注意焦点仮説を用いて考察されており、プレッシャーがかかることにより注意焦点が変化することを指摘している(Wine,1971, Masters,1992)。しかし本研究の結果から、プレッシャーがない状況下においても特性不安の高さと注意の変化が関係していることが示唆された。

学校種別による情動知能と心理的競技能力の関連

— 高校生および大学生女子ソフトボール選手を対象として —

○ 渋谷愛佳 (大阪体育大学大学院)、土屋裕睦 (大阪体育大学)

キーワード：情動知能，心理的競技能力，ソフトボール

目的

本研究は情動知能と心理的競技能力の関連について学校種別による違いを明らかにすることを目的とした。

方法

女子ソフトボール部に所属する選手 201 名 (高校生 99 名，大学生 102 名，平均年齢 18.33 歳±2.13) を対象に、情動知能尺度 (EQS：内山ら，2001) ならびに心理的競技能力診断検査 (DIPCA.3：徳永・橋本，2000) に回答を求めた。

結果と考察

学校種別を独立変数とする *t* 検定を行った結果，EQS の「自己コントロール」「愛他心」「状況洞察」DIPCA.3 の「忍耐力」「闘争心」「自信」「決断力」「判断力」において大学生が高い値を示した (表 1)。また，EQS と DIPCA.3 偏相関分析を行った結果，DIPCA.3 の「リラックス能力」のみ EQS の下位因子全てに関連が見られなかった (表 2)。先行研究では過去の運動経験の差異が情動知能に影響を及ぼしていることが示されている。(西垣・小塩，2012) また，心理的競技能力においても同様の結果が示されている。(米地・田沼，2016) このことから，高校生と大学生では運動経験の差異があることから，本研究でも同様の結果が得られたと考察する。

まとめ

本研究では情動知能と心理的競技能力の関連が学校種別による違いが明らかにされた。

表1. 下位尺度ごとの平均値，SDと学校種別

下位尺度	高校生 平均 (SD)	大学生 平均 (SD)	<i>t</i> 値	<i>d f</i>
〈情動知能：EQS〉				
自己洞察	15.77(4.83)	16.27(4.66)	.76	199
自己動機づけ	17.97(4.91)	19.08(4.01)	1.76	199
自己コントロール	23.33(6.22)	26.19(5.91)	3.33 *	198
共感性	19.98(4.25)	20.47(4.25)	1.23	189
愛他心	18.49(4.39)	19.97(3.41)	2.66 *	185
対人コントロール	21.62(6.35)	22.47(6.44)	.95	199
状況洞察	22.35(5.92)	24.32(5.94)	2.35 *	199
リーダーシップ	10.93(6.03)	12.25(5.67)	1.61	199
状況コントロール	13.58(5.32)	14.52(4.98)	1.30	199
〈心理的競技能力：DIPCA.3〉				
忍耐力	13.79(3.26)	15.18(2.71)	3.28 *	190
闘争心	16.60(3.52)	17.70(2.59)	2.52 *	180
自己実現意欲	15.63(2.54)	16.00(2.27)	1.10	199
勝利意欲	16.41(2.88)	15.67(2.49)	1.97	199
自己コントロール能力	9.81(1.60)	9.94(1.55)	.60	199
リラックス能力	11.79(1.11)	12.00(1.18)	1.31	199
集中力	12.03(1.08)	12.00(0.97)	.21	199
自信	10.91(3.96)	12.16(3.16)	2.46 *	187
決断力	11.11(4.18)	12.76(3.50)	3.05 *	199
予測力	12.15(4.00)	12.76(3.05)	1.22	183
判断力	11.52(4.29)	12.97(3.35)	2.68 *	185
協調性	17.02(3.23)	17.72(2.76)	1.64	199

**p*<.05

表2. 各下位尺度間の偏相関係数

DIPCA.3	EQS									
	自己洞察	自己動機づけ	自己コントロール	共感性	愛他心	対人コントロール	状況洞察	リーダーシップ	状況コントロール	
忍耐力	.34 **	.37 **	.49 **	.29 **	.22 **	.42 **	.52 **	.52 **	.53 **	
闘争心	.32 **	.41 **	.39 **	.34 **	.34 **	.22 **	.34 **	.21 **	.28 **	
自己実現意欲	.42 **	.49 **	.44 **	.34 **	.28 **	.26 **	.37 **	.20 **	.32 **	
勝利意欲	.21 **	.37 **	.26 **	.18 *	.15 *	.21 **	.19 **	.17 *	.17 **	
自己コントロール能力	-.07	.04	-.04	.05	-.03	-.08	-.16 *	-.13	-.21 **	
リラックス能力	-.06	.01	-.02	-.10	-.06	-.07	-.06	-.06	-.01	
集中力	.01	.12	.12	.11	.15*	.16*	.03	.08	.14	
自信	.41 **	.29 **	.42 **	.14 *	.07	.39 **	.55 **	.54 **	.52 **	
決断力	.42 **	.26 **	.47 **	.15 *	.09	.42 **	.60 **	.66 **	.59 **	
予測力	.39 **	.27 **	.46 **	.24 **	.15 *	.47 **	.50 **	.57 **	.55 **	
判断力	.46 **	.22 **	.46 **	.16 *	.08	.44 **	.57 **	.65 **	.59 **	
協調性	.41 **	.33 **	.47 **	.48 **	.41 **	.42 **	.37 **	.38 **	.46 **	

注) 制変数 = 競技レベル，学校種別，年齢，競技年数

p*<.05,*p*<.01

チームメイト間における対人ストレスとあがりの関連性について

-大学女子サッカー選手に着目して-

○大田亜海（大阪体育大学大学院）、土屋裕睦（大阪体育大学）

キーワード：対人ストレス、あがり、サッカー、集団競技

目的

本研究では、同チーム内に所属している選手同士の対人関係により引き起こされた対人ストレスとあがりとの関連性を明らかにする事を目的にした。

方法

調査対象者

大学女子サッカー選手 144 名(18-22 歳)を対象に質問紙調査を行った。

調査期間

令和 3 年 7 月上旬-8 月下旬であった。

調査内容

橋本(2005)が作成した対人ストレス尺度と市村(1965)が作成したあがりの質問紙(計 42 項目)について、最近(2-3 週間)の試合中を想起してもらい、その時の状況の時に、どの程度あてはまるかを回答してもらった。回答はすべて単一回答とした。

結果

1 年生を下級生群(n=49)、2-4 年生を上級生群(n=95)の 2 群を独立変数とする t 検定を行った(表 1)。その結果、下級生と上級生では、対人ストレスとあがりの感じ方に差があることが分かった。

t 検定を行った結果、有意な差が認められたため、学年別(1・2・3・4 年生)で一元配置分散分析を行った。その結果、1 年生

が最も対人ストレスとあがりを感じやすいことが分かった。新入生部員は入部時間的経過に伴い対人関係における軋轢に直面していることが示されている(土屋・中込, 1998)。このことから、新入生部員に対する心理的支援の必要性が示唆された。

次に、対人ストレス尺度の下位因子(3 因子)とあがりの質問紙の下位因子(5 因子)の関連性について検討する為に、相関分析を行った(表 3)。その結果、対人ストレスの下位尺度とあがりの各因子と中程度の相関がみられた。このことから、対人ストレスとあがりは関連性がある事が明らかになった。

表1. 下位因子ごとの平均値, SD と学年別(n=144)

下位尺度	学年別		t値	df
	下級生 平均(SD)	上級生 平均(SD)		
対人ストレス尺度				
対人過失	12.00(3.63)	10.43(3.11)	2.71 *	142
対人摩擦	13.53(5.35)	12.38(4.30)	1.40 *	142
対人葛藤	9.45(4.10)	8.11(2.76)	2.33 **	142
あがりの質問紙				
交感神経系の緊張	10.92(5.25)	9.81(4.65)	1.30	142
心的緊張力の低下	12.63(6.13)	7.29(5.63)	5.24 **	142
運動技能の混乱	14.82(6.93)	12.55(5.59)	2.12 *	142
不安感情	13.22(5.98)	10.76(5.02)	2.61 *	142
劣等感情	9.00(4.43)	7.61(3.66)	2.01 *	142

*p<.05, **p<.01

表2. 下位因子尺度間の相関係数(n=144)

あがりの質問紙	対人ストレス尺度		
	対人過失	対人摩擦	対人葛藤
交感神経系の緊張	.44**	.45**	.48**
心的緊張力の低下	.56**	.50**	.44**
運動技能の混乱	.53**	.48**	.40**
不安感情	.45**	.46**	.46**
劣等感情	.48**	.45**	.45**

**p<.01

小学校体育科におけるネット型ゲームの授業研究

— 「バウンドゲームから3人バレーボール」への積み重ねの有効性について—

○ 田井萌々香（和歌山大学）

キーワード：小学校バレーボール授業, ネットのない教材

I. 方法

身体教育研究会（2017）が示す「ネット型」教材のカリキュラムのうち、中学年に位置しているバウンドゲームと3人バレーボールを積み重ねた教材の実践を依頼し、技能の側面からその有用性を検討した。

II. 結果と考察

1. バウンドゲームについて

「頭の上でのキャッチミス」の回数について減少が認められた。児童はゲームを重ねるごとに、ボールの下に入りこみ、頭の上で正確にボールをキャッチすることが出来るようになっていた。そして「ラリー回数」の有意な向上（* $p < 0.05$ ）へ繋がったと推察される。このことから、児童はボールの落下地点を予測し、ボールの落下地点に入りこむといった「オーバーハンドパス」の技能の基礎を身に付けることが出来たと考えられる。

2. 3人バレーボール①について

児童はバウンドゲームから継続してボールの落下地点を予測し、ボールの下に入りこむことが出来ていた。そしてオーバーハンドパスの技能が向上し、1球目を触った児童が仲間にパスをする際に余裕が生まれ、味方が返球しやすいボールをパスすることが出来るようになっていた。このことが2段攻撃出現率の有意な向上（* $p < 0.05$ ）や2

段攻撃成功率の増加に繋がったと考えられる。2段攻撃成功率とは2段攻撃出現率のうち、相手コートへ返球できた確率のことである。そして、これらが結果的に「ラリー回数」の有意な向上（* $p < 0.05$ ）へと繋がったと推察される。これらのことから、児童はバウンドゲームの経験を生かし、オーバーハンドパスの技能を向上させることができ、ラリーを続けることができたと考えられる。

3. 3人バレーボール②について

「相手への返球の成功本数」が増加し、2本目を相手コートへ返球する児童が得点をする意図を持ち、相手コートの守備者がいない位置へ返球することが出来るようになっていた。このことから3人バレーボール②では「相手コートのスキを狙うプレイ」が見られ、児童はゲームの意図を理解していたことが示唆された。

III. まとめ

それぞれのゲームにおいて、児童がゲームの意図を理解し、段階的に身に付けるべき技能を身に付けられたことが示唆された。そのため、「ネットのない教材」から「ネットのある教材」へ積み重ねていくやり方は、小学校バレーボール授業のはじめの段階として子どもに合った教材になり得る可能性の高いことが考えられた。

オンライン放課後

ー運動遊びを通じた子どもの居場所づくりー

○村瀬浩二（和歌山大学）

キーワード：Zoom、ボランティア、コンテンツ開発

目的

本研究では、大学生ボランティアを中心としたプレイリーダーにより運営される、ヴァーチャルな運動遊び空間を創造する。この空間においてヴァーチャルな運動遊びに適したオンラインシステムのデザインとファシリテーションの行い方を確立し、アクションリサーチ研究によって、プログラムの開発と検証を行う。

方法

Zoomを介したオンライン遊び場を開催し、そこで生成されたオンライン向けコンテンツの検証を行う。

実施内容

II オンライン遊び場実施内容

本研究はオンライン遊び場として6実践、合計24日間を実施した。内訳は下記のとおりである。

実践1. 現職学校教員がファシリテーターとなった実践

- ① 2020年5月上旬3日間、参加者12名
- ② 2020年12月下旬3日間、参加者8名
- ③ 2021年5月上旬3日間、参加者50名

実践2. 大学生がファシリテーターとなった実践

- ① 「Wadai Club Online」
2020年11月～計10日間、参加者4名
- ② 「淡輪幼稚園オンライン遊び場」
2021年6月日間、参加者15名
- ③ スペシャルオリンピック遊び場
2022年2月3日間、参加者4名

現職教員がファシリテーターとなった3実践は主にコンテンツと運営方法の開発を行った。大学生がファシリテーターとなっ

た実践2では実践1で開発されたコンテンツを用いて学生主体でオンライン遊び場が運営された。

結果および考察

現職教員がファシリテーターとなった実践において開発されたコンテンツは以下のとおりである。

- ・体じゃんけん、体しゅりけん
- ・表現運動
- ・見えない世界で遊ぼう
- ・シューティングゲームで遊ぼう
- ・遊びを創って遊ぼう
- ・まねっこ遊び、新聞紙ボール遊び

ファシリテーターがZoomの画面を介して遊びを伝達していく中で、一方通行にならないことが配慮された内容であった。特に、「シューティングゲーム」や「表現運動」、「まねっこ遊び」、「遊びを創って遊ぼう」といった遊びでは、子どもたちが自身で考案した遊びを発表できる時間が準備されており、参加者の誰もが主体的に発言していた。

これを実践2において運用したが、参加者の年齢層が低く、自身で発表できる時間を確保することは難しかった。しかし、実践2-③では障害のある子どもから自身の動きを発表する場面が見られた。また、①においても各々で考えた動きを発表する場面は見られた。

このことは、オンライン遊び場のコンテンツが、参加者に平等な表現機会を与えることを示唆する。

追記：本研究は2020Mazda 研究助成を受けた

中学校保健体育科における攻守一体プレイ型（テニス）の授業実践

－中学校入門期の生徒を対象に－

○川島千鶴（和歌山大学）

キーワード：攻守一体プレイ型、テニス、タスポニー

目的

本研究では、テニスの教材化を試み、実験的授業を通してスキルテストとゲーム分析からその有効性を検討することを目的とした。

方法

タスポニーをドリルエクササイズとして導入した学習過程を作成し実験的に実践した。そして、スキルテストとゲーム分析からその学習過程の有効性を確かめた。

スキルテストは、単元開始時と単元終了時に実施する。生徒にフォアハンドストロークを3コースに打ち分けてもらい、成功した本数を数える。さらに、以前ソフトテニスの授業を受けた生徒の結果と比較することで、タスポニーの効果を確かめる。同時に、スキルテストの際のフォアハンドストロークのフォームを5段階評価し、レベルの変化をみる。

ゲーム分析では、意図のあるショットの数を数えた後、その中の技術の内訳を明らかにした。

結果と考察

1,スキルテストについて

男子において、タスポニーの効果は認められなかった。

女子において、以前ソフトテニスの授業を受けた生徒の比率の方が低く、タスポニーの効果があることが示唆された。

2,フォームの5段階評価

フォームのレベルが中程度以下の生徒の向上が認められた。すなわち、タスポニーは中学校入門期の生徒に効果のある教材になり得ることが考えられる。

3,ゲーム分析について

男女ともにアプローチショットの本数が増加したことから、ネットプレイで得点しようという意図が表れ始めていることが分かる。

さらに、授業観察より、タスポニーの際にネットプレイに出ていく生徒が増加した。これを踏まえ、タスポニーの経験が、ソフトテニスのゲームにおいてネットプレイにでることに活かされたのではないかと考えられる。

まとめ

本研究で得られたタスポニーによる結果の概要は以下の通りである。

- (1)レベルの中程度以下の生徒に効果があることが示唆された。
- (2)ネットプレイに出られるようになった。

以上のことから、タスポニーは中学校入門期の生徒に対して効果がある教材になり得ることが示唆された。

吹きこぼれ・落ちこぼれをつくらない

共生体育による児童の変化と効果

○河 彩歌（和歌山大学）、村瀬浩二（和歌山大学）

キーワード：共生，サッカー，体育

1 目的

新学習指導要領で体育や技能の程度、性別や障害の有無に関わらず、運動の多様な楽しみ方を共有すること。その際、共生の視点を重視することが明記されている。

「共生体育」とは全ての学習者が多様性を受容し合い、それぞれの能力を最大限に発揮する中で、豊かなスポーツライフに繋がる資質・能力の育成に資する体育のことである。これは、よりよい自分づくり、学級づくり、運動世界づくりをできる効果が期待できる(梅澤・苫野, 2020)。そこで、本研究では体育における様々な差があるなかで、児童がどのように課題を解消するためのルールのアイデア(以下アイテムとする)を出し、どのように共生体育を作り上げるのかを児童の心境の変化とともにみることを目的として観察する。

2 方法

和歌山県内における小学校の5年生31名のクラスを対象とする。実践内容は、2022年11月8日から12月6日まで全9時間でサッカーを対象とした。単元の全時間を、アイテムや教師の発言による児童の様子の変化を記録するビデオカメラによる撮影と観察、村瀬ほか(2017)で行った体育勤勉性尺度を参考に、協力・没頭・試行錯誤の3つの項目ごとに分け、グラフにし、各時間の推移を

見る学習アンケートカードの分析、2-9時間目の学習アンケートカードの自由形式の感想に記入された内容を、計量的テキスト分析ソフト KH Corder3. 0 共起ネットワークを各時間の授業の特徴を明らかにするために使用して分析する。

3 結果と考察

アイテムサッカーを取り入れた第3回から体育勤勉性尺度の「協力」・「試行錯誤」は第1・2回に比べ、ポイントが高い結果となった。アイテムを使用した児童は「アイテムをつけると怖さがなくなって落ち着いてパスを回せたりして楽しかった」という意見が多くでた。伴って技術の向上も見られた。第8回からは、学級全体の競技能力の向上により、アイテムの有効性が薄れ、苦戦する姿が見受けられたが、アイテムの調整についてチームの皆で活発に話し合う姿がみられた。共生体育の理念である、「全員がたのしむことができるように」を、教師は「全員が主役になることができるように」と伝え、チーム個人が「みんな」を意識し、よりよいチームづくりをし、アイテムの有効性を高めていた。

4 まとめ

共生体育を現場で広げていくことが、子どもの共生の心を育み、共生社会の形成につながり得るひとつの手段だと考えられる。

体育科授業におけるドローン映像の活用

○大岡諒真(和歌山大学)、村瀬浩二(和歌山大学)

キーワード：ドローン、ザースボール、共起ネットワーク図

目的

本研究では、ドローン映像をゲーム後の振り返りに取り入れることで児童に新たな視点を加え、戦術やオフザボールの動きといった広範な認識に変化を与えることを目的とした。

方法

本実践は、ゴール型ゲームの教材として、オフザボールの動きの習得に有効と報告されているザースボールを全8時間実施した。1時間目の授業後と単元終了後に児童によって記述された内容と、第2時～第6時にドローンの映像を使って行われた振り返りの音声データを文章化し、KH Coderを用いて分析を行った。

結果と考察

1. ドローン導入前

ドローン導入前の共起ネットワーク図を分析した結果、児童はボール操作の向上に関して興味を示しており、ボールを持っていない時の動きには関心が低いことを示唆していた。

2. ドローン導入時

ドローン導入時の共起ネットワーク図を分析した結果、ドローン映像を活用した振り返りを実施することで、児童の意識をボール操作からボールを持っていない時の動きへ変えることができたと推察される。

3. ドローン導入後

ドローン導入後では、ゲーム中の自分たちのパスや隊形を反省し、次回は改善していきたいという旨の発言が出てきた。これは、ドローン映像を使うことで、ゲーム中の動きを客観的な視点から振り返ることができたためと考えられる。このことから、ドローン映像を使った振り返りが児童の技能向上に役立っていたことが分かる。

4. 単元終了後

空いているスペースがわかりやすく、作戦を立てやすいという記述が多く見られた。したがって、ドローン映像を使った振り返りを実施することは、児童らに新たな視点を与え、オフザボールの動きへの意識を高めていたことが分かる。

まとめ

ドローン映像を使った振り返りを実施することで、俯瞰的な視点を児童に与えることができ、空いているスペースや自分たちの動きを客観的に振り返ることに繋げることができた。以上のことから、ドローン映像が学習を促進するツールになっていたと推察できる。

また、児童がドローン映像のメリットを多数記述していたことから、ドローン映像の活用が児童の技能・思考力の向上に一定の効果があったと判断できる。

紀美野町におけるスポーツを活用した地域課題の解決に向けた取り組みの検証

○相奈良律（公益財団法人大阪府レクリエーション協会）、横山誠（大阪国際大学）、
中野卓（Kimino-Labo）

キーワード：子育て、スポーツ、地域課題

目的

昨今、保護者の就業状況などによる学童保育のニーズは非常に高く、都市部ではキャパシティの問題など利用者のニーズに応えることができていない状況である。人口減少が課題となっている地域でも学童保育利用者は多く、子どもの「遊びと生活の場」として重要な役割を担っている。子どもが遊びやスポーツに自発的に参加し、仲間と楽しさを共有していくためには、大人の援助が必要である。また、学校だけでなく地域におけるスポーツ機会の充実や環境整備も課題のひとつである。

児童の約半数が学童保育を利用している和歌山県海草郡紀美野町では「特色ある学童保育づくり」活動の一環として、昨年は8回のスポーツ教室を試験的に実施した。本研究の目的は「子ども子育て応援宣言」を掲げる紀美野町における「スポーツ」を用いた地域課題の解決に向けた取り組みを検証することである。

方法

アンケートは、2022年11月中旬に約2週間の期間で行った。調査方法はGoogle Formsを用いて学童保育に登録している保護者に対してWeb調査を行った。主な質問項目は、夏休みに実施されたスポーツ教室への参加の有無やスポーツ教室に対しての意見や要望などである。分析は主に記述内容を中心に行った。

結果と考察

学童保育に登録している保護者28名より回答を得ることができた。そのうち13名は夏休みに実施されたスポーツ教室へ参加していた。参加した理由は、「体を動かすことをさせたかった。」という保護者の希望と「子どもが行ってみたいと言ったから。」「体を動かすのが好きだから。」という子どもが自発的に参加意思を示したものがみられた。参加していなかった15名からは「知らなかった。」「用事があった。」「友達が参加していなかった。」という回答が得られた。スポーツ教室に対しては、「良い取り組み。」「楽しかったようです。」「これからも続けて欲しい。」「体験できるスポーツが増えるとよい。」といった肯定的な意見が多数みられた。

学童保育で過ごす放課後について「色々な体験活動の充実」50.0%、「安心・安全な居場所づくりの提供」42.9%、「子どものやりたいことが自由にできる環境づくり」7.1%を望んでおり、次回スポーツ教室が開催されたら参加させたいかどうかという問いに対しても「何でも経験してほしいから。」「色々なスポーツがある事を知ってほしいから。」「体験できるチャンス。」といった子どものスポーツ参加の機会がさらに増えることを期待していることがうかがえた。

コロナ禍におけるアウトドアレクリエーションの評価に関する一考察

○横山誠（大阪国際大学）

キーワード：アウトドアレクリエーション、評価、大学生

目的

長引くコロナ禍において、行動制限や自粛によるストレス、運動不足を解消する観点などから自然の中での活動や自然を感じるような楽しみ方に注目が集まっている。

国内外では、コロナ禍におけるアウトドアレクリエーション（以下、OR とする）の効果等に関する研究も報告され、こうした活動が人や社会に有益であることが改めて証明されている。

本研究の目的は、コロナ禍における大学生の OR に対する評価を明らかにし、アフターコロナを見据えた OR の今日的な意義について再検討することである。

方法

本研究の調査対象者は大学生とし、OR の評価に関する項目など Google Forms を用いた Web 調査を行った。調査期間は 2022 年 12 月 14 日から 2023 年 1 月 23 日で有効回答数は 274 であった。

本研究の手順として、まず OR に関する評価項目の検討の為、野外教育、社会教育、スポーツマネジメント、レクリエーション、観光学、社会心理学、スポーツ医学などを専門とする共同研究者らで協議を行った。また、社会人として大学院後期課程に在籍し、大学生の動機づけ調整方略の評価尺度開発やレジャー参加動機尺度の検証などの研究に取り組む研究者からも助言を得るなどして OR を評価する 37 項目の質問を作成した。そして「1.全く重要でな

い」から「7.非常に重要」の 7 段階リッカート尺度を用いて回答を求め、探索的因子分析により因子の抽出を行った。抽出された因子については、クロンバックの α 係数を用いて信頼性の検証を行った。統計処理は、IBM SPSS Statistics28 を使用し、有意水準は 5% に設定した。

結果

分析では、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を用いた。因子数を 4 と設定し、因子負荷量が .40 以上を分析の対象とし因子分析を繰り返した。その結果、3 項目が削除された。

抽出された因子の構成として、第 1 因子は 12 項目（因子寄与率：10.43、 $\alpha=.908$ ）、第 2 因子は 11 項目（因子寄与率：12.78、 $\alpha=.950$ ）、第 3 因子は 9 項目（因子寄与率：9.96、 $\alpha=.892$ ）、第 4 因子は（因子寄与率：5.04、 $\alpha=.910$ ）であった。因子名はそれぞれ、「地域・ベネフィット」、「心理的効果」、「マネジメント」、「非日常」と命名した。

本研究では大学生のみを対象としたが、今後は OR 実践者を対象とした同様の分析や、大学生と実践者の比較等を行う予定である。

付記：本研究は、令和 4 年度大阪国際大学特別研究に採択された「アウトドアレクリエーションにおける評価尺度の作成と効果の検証～今日的意義の再検討～（共同研究者：相奈良律、青木康太郎、加藤淳一、新村由恵、高山昌子）」の成果の一部である。

大阪体育学会第 61 回大会実行委員会

大会会長 林修（和歌山大学）
大会実行委員長 村瀬浩二（和歌山大学）

実行委員 矢野勝（和歌山大学）
本山貢（和歌山大学）
池田拓人（和歌山大学）
片渕美穂子（和歌山大学）
彦次佳（和歌山大学）
本山司（高野山大学）

大会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷 930 和歌山大学教育学部村瀬研究室内
大阪体育学会第 61 回大会事務局
TEL : 073-457-7266
Email : ospe20230319@gmail.com
HP: <https://sites.google.com/view/osakataiiku61/home>

令和 5 年 2 月 28 日印刷発行 非売品

発行者 大阪体育学会第 61 回大会長 林修
発行所 〒640-8510 和歌山市栄谷 930
和歌山大学教育学部村瀬研究室内
大阪体育学会第 61 回大会事務局
TEL : 073-457-7266

印刷所

広告・寄付協賛企業一覧（順不同）

大阪体育大学

株式会社サン・ワイズ



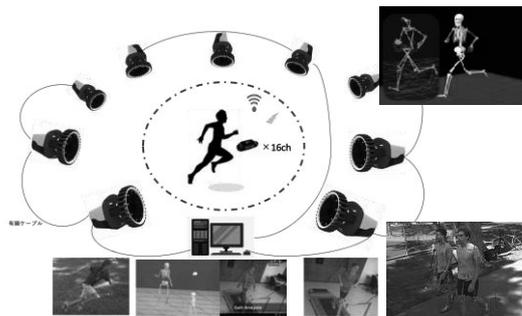
一次世代ウェアラブルセンサー
貼る表皮体温測定センサシステム
「ハルシェ」登場！

ハルシェとは、
24時間体温モニタリング共有システムです。
コイン型センサを張り付け表皮体温データ
をスマホで収集しアプリでAI分析します。



マーカレスモーションキャプチャシステム

マーカー装着が要らない三次元動作解析システム
ワイヤレス筋電センサ、床反力計と同期計測可能



THEIA マーカレスモーションキャプチャー・ティア

歩容測定ツール：A M Unit:歩行分析機器

マーカー装着が要らないシステム



「いままでに無かった歩行測定方法！
何もつけず、映像も取らずに！
歩くだけで、即時に自動測定！」



歩幅測定

歩行速度測定

歩数測定

株式会社サン・ワイズ

〒542-0081大阪市中央区南船場3-11-18担当：大井 稔

携帯：090-5410-5873 Email：ooi@sunwise.co.jp

スポーツと未来をつなぐ人になる。

スポーツに打ち込む。スポーツ科学を探究する。教える力を養う。

これらを極めていくプロセスは、

あなたが秘める可能性を飛躍的に伸ばしていきます。

「かつてあこがれていたあののようになりたい」

「尊敬するあの先生のようにになりたい」

充実したスポーツ施設、熱く親身な教員、スタッフ。

あなたが夢をかなえるための本物の環境が、

大阪体育大学には整っています。



2023年4月「幼児教育コース」を新設。2024年4月「スポーツ科学部」が始動。
※「スポーツ科学部」は設置構想中であり、予定が変更される場合があります。

体育学部

スポーツ教育学科

健康・スポーツ
マネジメント学科

健康・スポーツ
マネジメント学科

教育学部

教育学科

大学院

スポーツ科学
研究科

本物を学び、極める

 **大阪体育大学**
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES